

このコーナーでは、静岡が有する隠れた地域産業史的な建造物や文化財などを掘り起こし、紹介します。

茶輸出の中心地・静岡で、全国の浮世絵職人が制作した美しい木版ラベル



静岡茶は、江戸時代に生産が活発化し、全国各地に売り出されてきました。安政6年(1859)に横浜が開港されると、茶は輸出され、アメリカ人の嗜好をとらえました。明治時代には生糸と並び、輸出品の花形となりました。

静岡の茶は当初、船や鉄道で横浜に運ばれ、横浜から輸出されていましたが、昭和32年(1959)に清水港が開港場に指定されると、茶の直輸出の機運が高まり、明治39年には鈴木与平氏が日本郵船株式会社と寄港契約を結び、神奈川丸が静岡茶を清水港からアメリカへ初めて直輸出。横浜や神戸の外国商館の商人も静岡に来て、安西通りから安倍川まで再製茶工場が立ち並びました。明治42年には清水港からの茶の輸出は6300トンとなり、横浜港を上回りました。

茶の輸出は、外国の輸入元からの注文を在日商館が引き受けました。茶生産者は、仲買人を通して商館に売り込み、荒茶を買い入れた商館は、輸出用に乾燥する再製から梱包までを手がけて外国に送り出していました。

茶は、木箱に詰められた上に中国から輸入したゴザ(アンペラ)でくるみ、藤蔓や麻縄で縛り、側面に「蘭字」と呼ばれるラベルを貼りました。蘭字の「蘭」は中国語で西洋、「字」はラベルの意味。蘭字の基本的なパターンが完成したのは横浜で、関東の浮世絵師たちが制作にたずさわり、外国商館が絵柄を選びました。

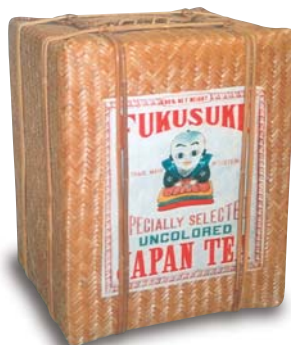
茶輸出の中心が静岡に移ると、新茶の直前に全国の浮世絵職人が静岡にやってきて、再製工場の中にある蘭字制作工場は、にぎわいました。

蘭字には輸入元の名称等が入り、取引内容がわかるので、国内での茶箱の輸送に際しては、蘭字の上に紙やアンペラを貼って隠したため、一般の目に触れることは、ほとんどありませんでした。

フェルケール博物館
静岡市清水区港町2-8-11
TEL.054-352-8060
<http://www.suzuyo.co.jp/suzuyo/verkehr/>



フェルケール博物館



蘭字が貼られた茶箱(レプリカ)



清水港での茶箱の荷役